

## 「AR で歩く歴史遠足 in 岡崎」の実践

井上 真美

(文学部歴史学科 3 回生)

### 1. 遠足の概要

現在、歴史学科文化遺産デザイン研修(以下、デザイン研修)では、AR(Augmented Reality、拡張現実)を利用した歴史遠足を企画している。本企画では、それぞれの時代の最先端技術を取り入れながら発展・変化していく岡崎の姿を実感してもらうことを目標としている。そのため、各時代の中心となるものとして、古代・中世では法勝寺を中心とした六勝寺、近・現代では第四回内国勲業博覧会や琵琶湖疏水の利用などを取り上げている。現在では直接目にするのが不可能な当時の様子を視覚的に見てもらうことができるよう、復原図や当時の写真を使い、AR の作成を行っている(写真 1)。



(写真 1)今回作成した AR のトリガー

### 2. 調査の経過と内容

先に示した AR を用いた遠足を行う上でデザイン研修では、各時代に分かれて京都府立総合資料館に所蔵されている文献史料や発掘調査成果、京都市埋蔵文化財研究所所蔵の出土遺物等をもとに調査を進め、現地でのフィールドワークを行っている。現在までの調査で判明したことを以下にまとめる。

古代・中世では、2010 年に実施された「法勝寺跡発掘調査」で得られた成果と『続群書類従』に残る六勝寺関連の史料をもとに、宗教色豊かだった頃の岡崎の地を見出している。又、考古学的な側面では、それまであまり研究が進んでいなかったこともあり、岡崎の地に対して「密教が繋ぐ日本・遼・高麗」という独自の解釈を試みている。これは、法勝寺内に建てられた八角九重塔の形状とそこで使われていた瓦にいくつか疑問が呈されたことを発端としている。まず、その形状についてだが、元来日本寺院で八角塔を持つものは珍しい。法勝寺創建時に八角塔が主流となっていたのは遼である。そのことから法勝寺八角九重塔は遼の影響を受けているのではないかという推論にいたった。遼の影響については、当時日本と遼との間に正式な国交は結ばれていなかったものの、平安時代末期には宋の渡航禁止政策に乗じた日本人が東アジアの貿易に関わっていたことが明らかとなっている<sup>1)</sup>。高麗や遼との交易が禁止された宋の商人が日本の商人と結びつき、日本を経由するような形でその二ヶ国と交

易をしていた可能性が指摘されており<sup>ii</sup>、そこから遼の文物の流入や文化が伝播された可能性が示唆できた。また、当時の遼は密教や華嚴宗を信仰しており、日本における信仰と類似するものも多く見られる。その関係から日本が仏教関係の文物を求めた可能性も挙げられる。

このようなことから、遼・高麗との関係が見られる法勝寺だが、それは法勝寺に使われた瓦にも見取ることができる。ここで用いられた瓦は、それまでの日本ではあまり見られなかった梵字の描かれた軒先瓦が使用されている。梵字とはサンスクリット語に由来し、後の時代には一字で仏や墓里をあてはめ信仰の対象になったもので、これが白河天皇の時代に流行している。この梵字が描かれた梵字文瓦は仏教が隆盛した高麗中期に流行が見られ、この影響を受けたものではないかと推測している。

中世については、法勝寺を中心として尊勝寺、最勝寺、円勝寺、成勝寺、延勝寺が当代天皇の御願寺として建立されたことで、一層宗教的色彩が強まっていく様子が明らかになっている。その周囲には院近臣達により仏堂が建立され、そこで往生を遂げる者も現れるようになった。法勝寺を中心とした地域は信仰の核となり、白河地域は宗教都市ともいえる景観を呈しており、また他地域の最先端の文化を取り入れることで国際色豊かなものであったと考えている。

近・現代では、第四回内国勸業博覧会(以下、勸業博覧会)と平安遷都千百年記念祭、琵琶湖疏水を中心に調査を進めている。明治期の京都は、東京奠都によって産業が低迷し、街の活気を失っていたなか、1892(明治 25)年に、京都の実業家有志は平安遷都千百年記念祭、勸業博覧会、京都・舞鶴間鉄道の開設を「三大事件」と名づけて、京都商工同盟会が結成され、三大事件の実現に向けて活動が始められた。そのなかの勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が「何故岡崎の地が選ばれたのか」ということを問題提起にし、その理由を疏水事業に求めている。疎水事業の調査については以下に詳細を示すが、これにより岡崎地域に十分な電力が用意できたこと、水運や電力を利用しての路面電車による輸送手段の確保等が、岡崎の地が選ばれた理由にあげることができると考えている。

琵琶湖疏水では、その建設理由と利用を主として調査した。琵琶湖疏水の計画自体は江戸時代より進められていたものの、技術の問題から実現できなかつた。しかし、水不足といった問題や運輸関係への対処のため、水の確保や京都の近代化を進めることを目的に疏水工事は着工された。先にも述べたが、東京奠都により京都は衰退していくなか、そのことに危機感を覚えたのが北垣国道(第三代京都府知事)である。北垣は京都復興事業推進を決定、その一つとして琵琶湖疏水を建設することにし、早速測量調査を開始、膨大な予算を国から勝ち取るため大臣や役人と交渉した結果、疏水の建設は認められたのである。工事の責任者には卒業論文で「琵琶湖疏水工事の計画」を書いた当時 21 歳の田邊朔郎が抜擢されている。明治 18 年(1885)から建設着工され、工事は当時最新の技術を用いて設計から施行まで日本人の手だけで仕上げられたことが明らかになっている。工事は殉職者が出るほどの難工事であり、蹴上船溜まり近くには「疏水工事殉職者弔魂碑」が、蹴上インクライン公園には「殉職者の碑」がある。明治 23 年(1890)に完成し、琵琶湖疏水は日本近代を代表する土木事業としても知られるようになった。

### 3. プレ遠足の実施

これら調査内容を用い、実際に遠足を実施するにあたり、デザイン研修では2014年2月16日に、予行練習としてプレ遠足を行った。参加者として学生を招き、コースの各所で説明を加えながら岡崎地域を巡った(写真2、3)。実際には見ることができない遺物や復元図等はARを用い、参加者には見てもらった(写真4)。16日は京都マラソンの実施日でもあったため、実際の遠足とは異なるコースを回ることとなり、参加者に実際に見てもらえない文化財等もあり、少し遺憾な部分も見られた。

今後の課題としては、遠足という形を通して、実際にモノに触れ、その土地にあるモノを『見せる』解説を心掛けることが一番に挙げられる。過去の出来事を説明するだけに留まってしまうと、現地を巡る必要性が失われてしまう。過去と現在を結び合わせ、各時代に起こった出来事を関連付けさせ、相互に関係しあっていることを、参加者に感じ取っていただけるような遠足を目指したいと思う。



(写真2)歩きながら参加者に説明



(写真3)平安神宮内で説明をしている様子



(写真 4)AR を見る参加者たち

---

i 『百練抄』の嘉保元年(1094)の項目に、大宰権帥藤原伊房が明範という僧を送り、貿易を行っていたとの記載がある。

ii 寛治6年(1093)遼に向かっていたと思われる日宋商船が高麗で拿捕された。

---

京都地域情報・文化遺産データベースの展開・活用  
—「郡村誌」の地図化と二ノ瀬・岡崎を事例に—

編集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

発行 京都府立大学文学部歴史学科文化情報学研究室

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2014年3月31日

印刷 株式会社 双林印刷社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル

---